

特別講演 1

「骨粗鬆症治療の将来展望と新規 SERM の位置づけ」

近畿大学医学部奈良病院 整形外科・リウマチ科 教授

宗圓 聰 先生

骨粗鬆症治療の目標は骨折危険性を抑制し、QOL の維持改善をはかることである。骨粗鬆症関連骨折の内、QOL 障害や生命予後の点で重要な骨折は大腿骨近位部骨折である。海外では 1990 年代後半から 2000 年代はじめにかけて、同骨折の発生率は減少しているが、わが国では 2007 年時点で未だ減少していない。椎体骨折防止効果はほとんどの薬に認めるが、直接的な大腿骨近位部骨折防止効果はビスフォスフォネート製剤の一部にのみ認める。カナダの調査では、1997 年以降大腿骨近位部骨折の発生率減少を認めたが、使用された薬剤のほとんどはエチドロネートであった。本剤には直接的な大腿骨近位部骨折防止効果は証明されておらず、若年から使用することによる椎体骨折防止効果が将来の大腿骨近位部骨折の発生抑制につながったものと考えられ、骨粗鬆症治療においては、比較的若年から椎体骨折防止につとめ、特に最初の椎体骨折を防ぐことが最も重要であるといえる。新規 SERM であるバゼドキシフェンも比較的若年者に対する第一選択薬といえる。